『グローカル天理』第６号掲載論文要旨

井上昭夫　巻頭言「混沌化するローマ字表記」

現 在日本におけるローマ字表記の不統一であるため、現実に弊害も起きている。それはかな表記においても見られる。正書法も標準語もない日本語の状況は、情報 化する現代世界において経済活動や文化発信においても不利ではないか。「世界語」としての日本語のあるべき姿を、文明の視点から見直すべき時が来ているの ではないか。

太田　登・中井　精一　「天理教原典とやまとことば（６）　原典と表現法［１］」

指 定の助動詞「ジャ」と「ヤ」に注目して天理教原典を考察した場合、「おふでさき」では、当時新しいとされた「ヤ」が、およそ8首に一つの割合で出現するこ とが分かった。古い形式とされる「ジャ」は「おふでさき」には見当たらないものの、「おさしづ」に目をやればその使用が認められ、原典で併用されているこ とが確認された。「ジャ」と「ヤ」のそれぞれがどのような意味をもって使い分けられていたのか、今後の教学研究の進展を見守りたい。

笹田勝之　「天理教における悟りの構造について―他宗教との比較を通して―（６）　第一章「知ること」について［１］」

天理教は、一般に大切と考えられている「学問」と、仏教が重要視している「智慧」とについて、全面的に否定してはいないが、積極的に肯定しているようでもない。これはどういうことか、次回から具体的に考察する。

堀内みどり　「天理教異文化伝道の諸相（６）　天理教のコンゴ伝道［５］―ノソンガ氏おぢばへ」

偶然とも言えるノソンガ氏との出会いと繋がりを大切にされた二代真柱。海外布教伝道部にアフリカ課が設置され、初代課長となった深谷善和氏はブラジル巡教の帰途、ブラザビルでノソンガ氏と再会。その帰朝報告を聞かれた真柱は、ノソンガ氏をおぢばへ招くよう提案された。

佐藤浩司　「天理教東南アジア伝道誌（４）　戦前のフィリピン伝道［２］」

明治 38 年にフィリピンへ渡ることになる高野馬治郎を紹介する。当時所属教会は官憲の弾圧から脱会者が相次ぎ、布教に行き詰まり、経済的にも困窮していく状況にあった。この状況打開のため、高野は海外渡航を決意する。苦労して渡航に成功し、渡航後も困難な生活の中布教に励む。

金子　昭　「天理経営学―その歴史・哲学・展望―（６）　歴史編　天理教者の経営観［５］」

経営や経済には宗教を超えたプラグマティックな経営道徳が有効だ。しかし、その質を確保するのは、現実に対する厳しい批判を可能にする宗教である。心学と報徳思想の宗教性を検証し、これまでに見た3人の経営者の天理教的経営観を振り返る。

佐藤孝則　「エコロジーの思想と実践（６）　古代文明のリサイクルシステム」

今日の環境問題は、生態系のバランスが大きく崩れ、「循環システム」そ のものが機能しなくなったために起きている。メソポタミア文明とエジプト文明では日干しレンガが使われ、インダス文明では焼成レンガが使われた、どのレン ガも、それぞれの風土や気候に適したものであった。しかし、古代のエジプトでは、家庭ゴミは戸外の公共ゴミ置場に捨てられ、そこにはゴミ山ができていた。 おそらく、都市化が進んで人口が増加したことが、生ゴミを有機肥料として再資源化することを難しくしたのではないかと思われる。このような状況は、今日の ゴミ問題ともたいへん似ている。

小滝　透　「天理比較神秘論への試み（６）　啓示［１］」

啓示についての問題について言及してみた。啓示に関する重要性は今さら言うまでもないが、文化的歴史的な制約により、明らかな相違が見てとれる。次回は教祖の事例を、今回のムハンマドの場合と比較・検討してみたいと考える。

小林正佳　「芸術・癒し・宗教（６）　協動の仕組み」

「自然な動き」は、わたしたちの日常の動きのことではい。普段のままの わたし達は、それぞれ随分偏った動きを身につけてしまっている。快く踊るには、その偏りをほぐし、

舞踊の動きに開かれた、しなやかなからだをつくらなけれ ばならない。そうした柔らかい動きが、改まった訓練というより、踊る体験それ自体の積み重ねの中で実現される。

金子　珠理　「ジェンダー・女性学情報（６）　「ネイティヴ」のトポス［１］」

「西欧フェミニズム」の姿勢は「西欧」に限定されるものではないが、今回は第二波フェミニズムにおける「黒人」女性の扱われ方を考察し、またアフリカ系アメリカ人によるFGS批判の問題性にも言及する。

深川　治道　「エコロジカル　インタビュー（６）　環境マネジメントシステムと大学［６］」

ISO14001 では、環境方針を具体化したものとして、文書化された環境目的と環境方針の設定・維持が要求されている。ここでは ISO14001 を認証取得した4校の環境目的・目標とそれを実現するためのプログラムの一部を紹介する。

塩沢　千秋　「脳死・臓器移植—カナダ通信（６）　Engineered tissues」

臓器移植に変わる物として、未だ始まったばかりの生物工学による組織再生移植を紹介した。医学による治療はひたすら修理に勤め、命の根本に触れ、生死、種の区別を曖昧にしてしまう所までは進むべきではなかろう。

小椋　博　「宗教・スポーツ・賭け（６）　賭けのリスクと日常のリスク」

日常生活におけるリスクには、予期できず避けられないものがあるが、遊びとしての賭けのリスクにおいては、それから身を引く自由が保証される。賭けには社会問題の存在もあるが、賭けについての教養や節度を形成する「ギャンブル教育」を行うほうが現実的ではないか。

上杉　武夫　「都市の再生に向けて—アメリカ通信（６）　新しいライフスタイル」

世界の動きは都市化であり、これからの都市生活というライフスタイルの質の問題が大いに議論されなければならない。ここではライフスタイルの意味を考え、サステイナブル（共生的）なライフスタイルの研究を中心に紹介する。